

文化財ノート No.38

# 稲城市 豎台遺跡

(多摩ニュータウンNo.3遺跡)

稲城市教育委員会  
社会教育課

稲城市東長沼2111  
☎042-378-2111  
発行 2001. 3. 5



空から見た稲城市豎台遺跡（南側よりの空撮）

稲城市豎台遺跡（多摩ニュータウンNo.3遺跡）は、百村の堅神社東南側の豎台と呼ばれる台地上に広がる古代遺跡です。多摩ニュータウンの造成工事と土地区画整理事業に伴い3回の発掘調査が行われました。1回目と2回目は、昭和55～56年、63年に東京都埋蔵文化財センターによって行われ、3回目は平成3～5年に豎台遺跡調査会によって行われました。その結果、縄文時代、奈良平安時代、中世、近世の各時代に及ぶ大変規模の大きな複合遺跡であることがわかりました。遺跡から発見された住居跡や出土遺物によって、原始古代のこの地域の様子を探ってみましょう。



豎台遺跡の位置

## 縄文時代早期～中期（約6000年前～4000年前）

縄文時代は、豎穴住居跡5軒（前期1軒、中期4軒）が発見されています。特に縄文中期の時代には遺跡の南側の丘陵斜面に小さな集落を形成していたようです。またこの時代は、猪・鹿などの小動物を捕獲するための陥し穴土坑が遺跡全体に分布しており、その数は310基に及びます。分布の特徴は谷を囲む尾根斜面部と埋没谷を囲む斜面部から集中的に発見されています。

## 奈良平安時代（約1250年前～950年前）

奈良平安時代は、堅台遺跡のなかで一番中心となる時代です。8世紀前半から11世紀中頃にかけて集落が営まれました。この時期には、集落の中心的建物として、堅穴住居跡78軒、掘立柱建物跡41軒と土器焼成のための小堅穴遺構5軒が発見されました。この集落は300年以上にわたって継続しますが、細かく見ると11の時期に分かれます。そして出土遺物（須恵器や土師器など）なども検討すると、それぞれの時期でいくつかのグループに分かれて集落が形成されていたことがわかります。掘立柱建物跡は、3間×2間と2間×2間の規模のものがほとんどで、平安時代頃から出現しますが、堅穴住居と併存して集落を構成していたと考えられます。堅穴住居が住居用の建物であるのに対して、掘立柱建物は住居用、倉庫用などが考えられます。いずれにしても奈良時代から平安時代にかけてこの台地上に大規模な集落があったことがわかりました。

### 中世（室町時代頃）

奈良平安時代に大規模な集落があったこの堅台の台地は、中世になると居住地としての性格はなくなり、墓域としての性格に変わります。中世の時期は、地下式坑、方形土坑、円形土坑、溝状遺構によって構成されます。これらの遺構のうちで最も特徴的なのが、地下式坑群です。この地下式坑は、堅坑を掘ってから横方向に主室部をつくる形で、9基の地下式坑が群を構成して発見されました。出土遺物は2基から発見された板碑6枚のみであり、ほぼ15世紀前半の室町時代頃になると考えられます。

### 近世（江戸時代）

江戸時代になると、この台地は農耕地へと変貌します。江戸時代の遺構は、堅穴状遺構、井戸跡、円形土坑、溝状遺構によって構成され、いずれも農耕に関連した遺構と考えられます。堅穴状遺構は、農地につくられた作業小屋と考えられ、溝状遺構は、農耕地の土地利用を意図して区画された溝の可能性が考えられます。

参考文献、『稲城市史』『堅台遺跡発掘調査報告書』



堅台遺跡の全景（奈良平安時代の建物跡）

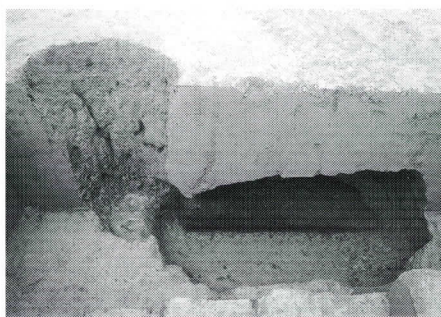
### 発見された遺構

		北 部	南 部	合 計
縄 文	堅穴住居跡	前期	1	1
		中期	1	3
	陥し穴土坑		2 5 8	5 2
	袋状土坑		1	1
	集石跡		8	1
奈 良 平 安	堅穴住居跡		7 8	7
	掘立柱建物跡		4 1	
	小堅穴跡		3	
	地下式坑		9	
中 世	方形土坑		2	
	円形土坑			1
	溝状遺構		1	1 3
	堅穴状遺構		1	
近 世	井戸跡		1	
	円形土坑		8	
	溝状遺構		2 8	
				2 8

※北部は堅台遺跡調査会の調査区域、南部は東京都埋蔵文化財センターの調査区域を示す



縄文時代の堅穴住居跡



中世の地下式坑